



平成25(2014)年度 研究拠点形成支援経費 難波・飛鳥・京都の歴史遺産の発掘と活用 成果報告集

著者	西本 昌弘, 積山 洋, 原田 正俊, 米田 文孝, 西光 慎治, 佐藤 健太郎, 藤井 陽輔, 三好 俊
ページ	1-83
発行年	2016-03-31
URL	http://hdl.handle.net/10112/10259

相国寺の伽藍・境内の変遷と火災

原田正俊

はじめに

洛中洛外の寺社を描いた絵図・境内図は、現在にいたるまで多数伝来している。こうした絵図の内、中世のものについては『日本荘園絵図聚影』¹⁾に有名な境内絵図が写真版で収録されており、その概要を知ることができる。この他、博物館の展覧会図録で、新たに収録されるものもあるが、絵図は大きいものも多く、細部の書き込みが不鮮明な場合もあり、史料として活用するのには不便である。

中世後期から近世の境内絵図については、十分に調査は進んでおらず、伝来する点数も増加しその全容を把握することは難しい。洛中の寺社についていえば、中世に遡る絵図の数は限定されているものの、中世末から近世のものは格段に増え、中世の景観を復原、考察する上でも重要な史料となり得るものがある。戦国期には、多数の寺社が所領を失い、伽藍の荒廢、境内地も武士の押領にあい、次第に縮小していく。近世になると豊臣秀吉の検地や徳川幕府による寺社領整理の過程で、所領が削減されると共に境内地も縮小していく傾向がある。特に洛中洛外の大寺社は、この時期に衰退していったり、境内地・伽藍の縮小、院家や塔頭の統廃合など大きな変動があった。近世の初頭には復興があり寺社の整備が進むが、明治維新时期には、廃仏毀釈の影響もあり、景観は大きく変わり、現代につながるものとなっている。

いずれにしろ、現在ものこる大規模な有名寺社であっても、古代・中世からの変容は著しく、歴史的にその変化を押さえていく必要がある。また、洛中洛外の場合、武家地の増加や町屋の展開など、都市史の問題を研究するためにも寺社絵図・境内図はきわめて有益な史料群なのである。

また、近世の絵図・境内図は、用途にもよるがサイズが大きなのものが多数あり、写真版では細部がわからないところも多く、書き込まれた文字も解読が困難なことがある。このためトレース図などを作成して、くずし字を読み取り、図上に記したものを作成することは、この種の史料を活用する第1歩といえることができる。

本研究班では、研究プロジェクト開始の作業として、著名な寺院境内図の所在を調査しリスト化し、また、研究状況を確認するためのものとして、研究文献一覧の作成を行った。さらに、トレースをもとにした考察を行った。次章以下では、絵図を読み解くための中世の状況を中心に伽藍・塔頭の変遷を明らかにした。さらに続く三好俊氏論文では、絵図のトレースとそこから読み取ることができる成果を紹介している。

(1) 相国寺の歴史と境内の変遷

今回京都班で、詳しい分析対象としたのは京都市上京区に所在する相国寺の境内図である。相国寺は現在、臨濟宗相国寺派の本山で、京都御所の北に位置し、同志社大学今出川キャンパスと同志社女子大学の間に惣門につながる道が通じている。もとの境内地は現在の同志社大学

今出川キャンパスの多くを含み、境内の北は上御霊社にも及ぶ広大な寺域を有していた。近世の絵図を読み解くためにも中世の状況を整理しておく必要があり、以下伽藍の変遷と火災について検討していきたい。

相国寺は、永徳2年（1382）足利義満によって創建され、開山は夢窓疎石である。なお、夢窓は既に没しており、現実の初代は春屋妙葩である。この時期、義満は武家としては破格の内大臣に昇り、摂関家をもしのぐ勢いであり、権力の著しい上昇期であった。これより先、現在の烏丸通の西には花の御所を構えており、創建時の意図は、自らが座禅修行をするための寺院建立であったが、春屋妙葩、義堂周信ら当時側近として周囲にいた禅僧たちの意見によって大寺院の建立へと決定した²⁾。場所も義満は花の御所から徒歩ですぐさま行ける場所として現在の位置が選ばれた。このような立地条件から、敷地の確保などで強引な移転作業が進められ、公家たちからも批判が出ている³⁾。創建時の一連の動向については、別稿⁴⁾で詳しくふれたが、いずれにしても相国寺の位置は、当時の土御門内裏の北、足利義満の花の御所の東といった政治中心地に隣接した場所であった。

鎌倉時代・南北朝時代に建立された禅寺が、東山の建仁寺、南禅寺、嵯峨の天龍寺、宝幢寺など、どちらかといえば離宮が営まれるような洛外の景勝の地に営まれたのに比べて、相国寺の位置はきわめて特別であった。相国寺内の鹿苑院には、五山全体を統轄する僧録が置かれ春屋妙葩が就任するが、この寺自体が幕府の宗教政策を分担する政庁的な機能も持っていた。中世を通して、この機能は維持され、室町殿の寺として相国寺は位置付けられていた。また、歴代の室町殿との政治的な近さから、権勢を持ち続けたのである。これによって、伽藍規模は広大なものとなった。

規模の大きい禅寺には、中国禅林の影響を受けた伽藍が建ち並ぶが、創建時の伽藍としては、洛北等持院の法堂の移築など転用の建物が多かったようで、永徳2年11月26日に五ヶ所の上棟が行われている。法堂の上棟、仏殿の立柱が同時にあった⁵⁾。これを便宜上、第1次伽藍（永徳）とする。明德3年（1392）8月28日に完成を祝う供養法会が営まれ、この時の伽藍は、排門・惣門・山（三）門・仏殿・土地堂・祖師堂・法堂・庫院・僧堂・方丈・浴室・東司・講堂・鐘楼が建ち並び、周囲は20余町の垣がめぐっていた⁶⁾。三門・仏殿・法堂が中心軸を形成する禅宗寺院の伽藍が整った。

（2）火災と復興

このように完成した寺院であったが、応永元年（1394）9月24日、直歳寮からの出火で諸堂・伽藍が焼失、完成後2年にして甚大な被害を被った⁷⁾。同年10月1日、夢窓の孫弟子にあたり、夢窓派の有力な僧である空谷明応が住持となり復興が始まった。幕府は三門造営のため寺社領からの年貢を借りてこれに充てた⁸⁾。また、段銭が寺社領にかけられたようで、鶴岡社が免除を求めている⁹⁾。どの程度の範囲で段銭が公家・寺社などの本所領にまでかけられたかは、不明であるが、幕府は威信にかけて再建を進めたことがわかる。

応永元年（1394）11月1日、再建の事始めがあり、11月28日には三門の立柱が行われた¹⁰⁾。応永3年4月2日には、法堂の立柱、6月23日仏殿が落成、7月10日三門の立柱が行われた¹¹⁾。これを第2次伽藍（応永）とする。

応永6年（1399）には、寺域外東に七重大塔が造営された。高さ360尺（約100メートル）の都を眺望する塔であった。この七重大塔も応永10年（1403）6月3日、落雷によって焼失する。義満の命で大塔は北山殿に再建されるが¹²⁾、応永23年（1416）正月9日、落雷で焼失¹³⁾、義持の命で相国寺の東に戻った。位置は「富小路東毘沙門堂南」¹⁴⁾とされ、現在塔之段の地名が残る。

応永25年（1418）3月3日、北小路今出川の酒屋から出火し、法界門、薬師堂が焼失、禁裏の近くであり大騒ぎとなった¹⁵⁾。

応永32年（1425）8月14日、柳原辺りで出火、相国寺賢（乾）徳院が炎上、乱風が起こり炎が数町も飛び、常德院・雲頂院・鹿苑院が焼亡、その後、火は僧堂に移り、さらに惣門を焼き、方丈・法堂・仏殿・三門・風呂・鎮守八幡宮に延焼、北風が強く、一条通に面した法界門まで焼けた。法界門に続く大路の東西にあった家屋が悉く焼け、中山定親の屋敷もあやうくなっている。

当時の風向きは北風であったことから、柳原から東に賢（乾）徳院があり、この塔頭は境内の北の方にあり、常德院以下、南へ火が進んだと考えられる。境内の中心軸より西に位置する塔頭が焼けたとみられる。僧堂の位置は不明であるが、南の惣門を焼き、北方にあったと考えられる方丈が燃えている。もちろん、火の進み方は一方向だけではなく、方丈は別方面からの延焼で先に燃え上がり、さらに別方向からの火が惣門に及んだとも考えられる。ただ、方丈から山門までは北から南への延焼であり、風の向きと合致する。さらに強風に煽られて惣門から南へ禁裏・仙洞方面に進み、一条通までの民家と法界門を焼き尽くしたのである¹⁶⁾。

室町殿や禁裏・仙洞など政治の中心地近くの火事であり、この記事を書いた中山定親は騎馬で院に馳せ参じており、情報はきわめて正確といえることができる。この火事の記事によって、応永年間に存在した、第2次伽藍（応永）の諸塔頭の配置をうかがうことができるのである。

火事を免れた塔頭は、勝定院・大徳院・大智院・法住院・大幢院・崇寿院・輪藏であった。本寺中の寮舎は全て焼けたとされており、方丈・庫裏を中心とした本坊は全焼したとみられる。また鐘楼も焼け落ち南都元興寺から運んだ鐘も焼けた。勝定院以下は、境内地の東側に位置したとみられる。

義持は落胆するが復興に着手し、応永32年（1425）10月7日には、再建の事始めが行われた¹⁷⁾。同年11月3日には、仏殿の立柱の記事がみえる¹⁸⁾。しかし、義持は応永35年正月18日に没し、義教の代まで造営は続けられた。永享2年（1430）6月9日、幕府内で相国寺再建について議論されるが財政難のため先送りされる¹⁹⁾。永享3年11月3日ようやく仏殿の上棟、法界門の立柱が行われた²⁰⁾。しかし、復興は順調に進まなかったようで、義教は造営の緩急をとがめ²¹⁾、永享7年11月7日、ようやく本尊脇侍の彫刻が始められた²²⁾。法堂にいたっては、永享9年4月20日に立柱となる²³⁾。こうしてなんとか再建が成し遂げられ、第3次伽藍（永享）が整備されたと考えられる。

しかし、応仁・文明の乱の勃発により、応仁元年（1467）10月、相国寺には東軍の細川勝元が陣をひいていたこともあり、西軍の攻撃で灰燼に帰した。

第4次伽藍（文明）としては、足利義政が、文明5年（1473）父義教の香華所である普広院を復興、義教三十三回忌の法会が営まれた²⁴⁾。但しこの普広院は東軍の陣中に設置された

ものである。文明10年には中心部の仮仏殿・法堂が建立された²⁵⁾。永正年間(1504～21)には、旧観に復したとされる。

しかし、天文20年(1551)7月3日、管領細川晴元は、相国寺に陣して、三好長慶方の松永久秀と戦い、下衆達が放火に及びまたもや全焼した²⁶⁾。

第5次伽藍(慶長)は、豊臣秀吉の側近としても活躍した住持の西笑承兌によって進められ、天正12年(1584)から始まる。現存の法堂は慶長10年(1605)の建立で、現存する法堂としては最大である。

以上、みてきたように伽藍の興廃は度々あり、中世の伽藍境内図が伝来しない現在、こうした記事をもとに旧観をうかがっていくことしかできない。塔頭の位置や規模も現在のものとは大きく異なっていたことがわかる。次の論考で近世の絵図の紹介があるが、絵図のトレースによって、近世復興時の面影を若干は補えるものと考えられる。こうした、作業を通じて、洛中洛外の寺社境内さらに都市の展開を復原・解明していくことは重要な研究課題といえる。

【註】

- 1) 『日本荘園絵図聚影』二、近畿一(山城)、1992年。
- 2) 『空華日用工夫略集』永徳2年9月29日、同10月21日条。
- 3) 『荒暦』永徳元年10月30日条。
- 4) 原田正俊「相国寺の創建と足利義満の仏事法会」『中世京都と室町政権の首府構想』文理閣、2016年予定。
- 5) 『空華日用工夫略集』永徳2年11月26日条、『荒暦』同日条、「万年山相国承天禅寺諸回向并疏」。
- 6) 「相国寺供養記」(『大日本史料』第7編之30)。
- 7) 『大日本史料』第7編之1、応永元年9月24日条。尚、火事と伽藍の造営については、『京都市の地名』(平凡社、1979年)が概要を示しているが、本稿では史料を補い考察を加えた。
- 8) 東寺百合文書才函87(『愛知県史』資料編9中世2)。
- 9) 「鶴岡社衆会所珍書状」(『大日本史料』第七編之1)。
- 10) 「和漢合符」「武家年代記」(『大日本史料』第7編之1)、「鹿苑院殿百年忌陞座」『翰林胡盧集』(『五山文学全集』第4巻)。
- 11) 「相国寺諸回向并疏」(『大日本史料』第7編之2)。
- 12) 「鎮守八幡宮供僧評定引付」応永10年間10月14日条(『大日本史料』大7編之6)。
- 13) 『看聞日記』応永23年正月9日条。
- 14) 『薩戒記』応永32年間6月28日条。
- 15) 『看聞日記』応永25年3月3日条、『満濟准后日記』同年月日条。
- 16) 『薩戒記』応永32年8月14日条。
- 17) 『師郷記』応永32年10月7日条。
- 18) 『師郷記』応永32年11月3日条。
- 19) 『満濟准后日記』同日条。
- 20) 『看聞日記』同日条。
- 21) 『蔭涼軒日録』永享7年9月18日条。
- 22) 『蔭涼軒日録』永享7年11月条。
- 23) 『蔭涼軒日録』永享9年4月20日条。
- 24) 『親長卿記』文明5年6月23日条、『大乘院寺社雜事記』文明5年6月24日条、『翰林胡盧集』(『大日本史料』第8編之6、文明5年6月24日条)。
- 25) 『蜷川親元日記』文明10年10月21日条。
- 26) 『巖助往年記』天文20年(1551)7月3日条。